

---

# 小さな運命共同体

哀 l o v e コナン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

小さな運命共同体

### 【Nコード】

N4767Z

### 【作者名】

哀loveコナン

### 【あらすじ】

短編集として書きたかったんですが、あまりにも長くなり過ぎて…連載にしました  
予定していたものプラス少し加えて、コ哀小説を今度は連載していきます。

医療全く無視をしたコ哀です。ネタバレになるので、どっちなかで言っておきます。どっちなかの死ネタになりますので、ご注意ください読んでください。

前作見ていただいた方はわかると思いますが、またあの優しい先生が出てきます。

コ哀を好きな人にとっては怒られるかもしれませんが、嫌な人はここでスルーしてください。

そして、今回は一話一話が短いと思います…前作と比べると…それと、あくまでコ哀なので、新一や新一の両親などの登場はありません…服部も（今の段階では）出てこないと思います。

それを含め、大丈夫な方のみ…閲覧お願いします。

## プロローグ 運命…それは…変えたいもの

運命……それは、一人一人が神様によって授けられたもの…。

運命……それは、自分自身でどうにでも変える事が出来るもの…。

きっと、これもまた…”運命”なのかもしれない…。

”工藤君…私は貴方に…何もしてあげられないのよ…”

”お前は生きてくれてるじゃねーか…それだけで充分だよ…”

その言葉を交わした君と僕との間には…何があっただろう？…その言葉…ちゃんと君に伝わったのかな…いつだって、励ましていたはずだったのに…。

でもこれが…君と僕の…最後の物語になってしまったんだね…。

君の運命を僕は変える事が出来たのかな…本当に君は…それで幸せになれたのかな…。

でも、君にあんな運命背負わせなくなかったんだ…だから、君の運命を…僕が変えてあげたかったんだ…。

だから、お願い…僕がした事、許して欲しいんだ…。

そして…生きる事を諦めないで…お願いだから…なあ、灰原！！

## ブログ〜運命…それは…変えたいもの（後書き）

始めました。

ブログなので今回は短いです…。

読んでもらって嬉しいです。

今回は不定期になりますが、よろしくお願いします。

時間があれば、それほどあかず、投稿できるとおもいます。

また、今回もヒントを残して、  
次に進みたいと思います。

次回ヒント  
準備したい事

次回、またよろしく願います。

## 診察結果

ある平日の朝…。

とある病院に来ていたコナンは、診察室で…蘭と小五郎が見守る中…医師によって、胸に聴診器を当てられていた…。

「うん…大丈夫だね。順調、順調…」

コナンの胸に当てられていた聴診器を離しながら、今度はコナンの頭に手を当てて微笑む先生の名は坂井医師…。

コナンが最も慕っている…コナンの主治医でもあった…。

「コナン君、こないだの話んだけど…そろそろ、準備したいんだ…返事聞かせてもらえるかい？」

「まだ、大丈夫だよ…」

そう話すコナンは何となく、淋しそうな表情を浮かべて俯いていた…。その様子に見兼ねた坂井医師は、コナンに言った。

「…ねえ、コナン君…先生、ちょっと毛利さんと蘭さんに話がしたいから…コナン君は先に戻っていてもらえるかい？」

「僕だけ…内緒の話？」

不安な面持ちで坂井医師の顔を覗き込むコナンを見た坂井医師は、につこり笑いながら…コナンの頭を撫でながら言った…。

「違っよ…コナン君が納得してもらえるように…相談しなきゃだか

ら…それに、早くしないと取り返しのつかない事になっちゃうからね…」

「…うん」

突きつけられた自分の現実には、コナンは納得しなくても、頷くしかなかった…。

そんなコナンを見た蘭はコナンの顔を覗き込んで、諭すかの様に話出した…。

「コナン君、大丈夫よ…すぐ行くから、病室でちゃんと待ってて…」

そう言われたコナンが診察室を後にした後、坂井医師は小五郎と蘭に話を始めた…。

「先日もお話ししましたが…コナン君の手術の準備をそろそろ取り掛かりたいと思うんですが…」

そう話す坂井医師だったが、コナンの事を思うあまり…自然と目が泳いでいた…。

「手術自体は、そう難しくないんですが…コナン君が手術を拒んでる今の状況では、こちらとしても手術を行えないんです…ですから、毛利さん達から説得してもらえませんか？」

コナンに病気の事や手術の事を話してから、コナンがずっと手術を拒み続けている事を坂井医師は心配していた…。

でももう、時間が限られている…そんなコナンの手術に、坂井医師は少しばかりの焦りを感じていた…。



「でも、先生…私達が言っても…コナン君、分かってくれないと思うんです…だから、先生から話してもらえるといいんですけど…」

蘭はコナンの性格を分かっていた…蘭達が手術の事を話しても”大丈夫”と言って、聞く耳を持たないかもしれないから…。

だから、先生からもう一度言われた方が分かってくれと、確信していた…。

## 診察結果（後書き）

今晚わ w w

今日は変な時間に投稿です w w

一応、ストックが溜まって来たので

しばらくは毎日投稿になるとおもいます w w

次回ヒント

哀ピンチ

次回もお楽しみに

**いなくなった小さな探偵と哀に迫る悪魔（前書き）**

今回、コナンは出て来ませんww

明日までお待ちください（。・111）

## いなくなつた小さな探偵と哀に迫る悪魔

「分かりました…」

蘭の頼みを聞き入れた、坂井医師はコナンにもう一度…手術の事を受け入れてもらえるように…蘭と小五郎を連れ、コナンが戻ったであろう病室に足を運んだ…。

コナンの病室の扉を開ける坂井医師は、目を見開いた…。

「あれ？コナン君？」

病室に戻るように言つたはずのコナンの姿がどこにもなかった…。

そればかりか、置いてあつたはずのランドセルが、見当たらない事に気付いて…坂井医師はため息を一つした…。

「あのガキ…どこ行きやがつた！！蘭、お前はここにいろつ…」

そう言つて、コナンを連れ戻しに行こうとする小五郎を坂井医師は止めた…。

「まあまあ、毛利さん…今すぐどうこういう問題ではありませんから…とりあえず、様子を見て見ましょう…コナン君ならきつと大丈夫ですから、帰ってくるのを待ちましょう？それに……」

そう言つて、腹を立ててる小五郎を落ち着かせた…そして、ひと呼吸置くと、再度口を開いて言つた…。

「行き先は…分かってますから…」

一方、阿笠邸では…自分自身に降りかかる悪魔が徐々に詰め寄ってる事に気づかず、哀はいつもの朝を過ごしていた…。

「博士…コーヒー、ここに置いとくわよ…」

「ああ、すまんな哀君………」

そう言うと、哀の差し出したコーヒーに手を伸ばし、それを口にするのを見た哀は…フッと笑い、嫌みをいいながら玄関へと歩き出した…。

「じゃ、私は学校に行ってくるわ…博士…私がいらないからと言って、高カロリーな物食べ過ぎないようにね…」

「分かっとなるわい………」

そういいながらも、残念そうな顔をする博士の顔を振り返って見た次の瞬間…哀は胸を抑えしゃがみこんでしまった…。

驚いた博士は哀に近づき、心配な面持ちで声をかけた…。

「哀君…どうしたんじゃ？」

「何でも…ハア…ないわ…ハア…いつもの事よ…ハア…すぐ治まるわ……」

「いつも?…」

驚いた博士は、哀の発言に耳を疑った…。

「最近、良く…ハア…あるのよ…でも、大丈夫よ…ハアハア…心配…ないわ…」

苦しみながら、心配する博士を氣遣う哀…暫くすると、本当に苦しさは治まった様子で…強張らせていた顔も正常に戻っていた。

それに安心していた哀はゆっくり立つと、”ね？”といった感じで笑って見せた…。

そんな哀の様子に不安になり、哀に病院へ行く様に勧めた…。

「平気よ…それより、博士…工藤君から何か聞いてない？」

「新…？何をじゃ？」

「2日も学校休んでるのよ…まあ、博士が聞いてないなら問題ないと思うけど…じゃ、行ってきまーす…」

博士の心配をよそに、哀はなにもなかったかの様に平気な顔をして学校に向かった…。

閉まる扉を目にして、哀やコナンの事が心配になった博士は…暫くその扉の前で一人、佇んでいた…。

## いなくなった小さな探偵と哀に迫る悪魔（後書き）

次回ヒント

噂の人物

今晚わわ

今年も残り3日になりましたね

今日はスペシャルばかりで、何をみようか迷ってしまいます。（

。111）

始まってまだ間もないこの小説なんですが、死ねたというのを了承して読んでいただき&お気に入り登録や感想いただき、ありがとうございます。

励みになります。

では、また明日の投稿をお待ちください

## 噂をすればの、登場

哀が教室の扉を開け、入ろうとした時…歩美、元太、光彦は哀の姿に一目散に駆け寄った…。

「哀ちゃん!!おはよー」

「灰原さん、おはようございます…」

話があると言わんばかりに、哀の顔をじつと見つめる三人に…哀は不思議に思いながら、平静を装って聞いてみた…。

「おはよ……どうしたの?そんな顔して…」

「哀ちゃん…またコナン君お休みだって…」

「えっ??そう…」

言いたい事は分かっていた哀だったが、休みと聞いて…少しばかり心配が募っていた…。

「昨日、俺ら探偵事務所に行ったんだ…でもよ、家んなか真っ暗で…誰も居なかったんだよ…」  
「何かあったんでしょうか?」

コナンの事が心配で堪らない少年探偵団…コナンが居るはずの探偵事務所に行っても誰もいないなんて事…今まで会ったんだろっか? そんな光景を目の当たりにした三人が、不安がらないはずもなかった…。

哀はそれでも、心配させない様にと諭しながら話始めた…。



「何言ってるのよ…彼なら大丈夫よ、ただの風邪でしょ？病院にでもいったんじゃない？」

「でも…」

「だいたい、何かあったなら私達に言ってくるでしょ？そういう人でしょ？江戸川君は…」

そういつて、三人を凝視した…。そんな哀を見て三人は泣く泣く頷くしかなかった。

「はい、みんなー、席に着いてー出席を取るまえに報告です。今日もコナン君は風邪でお休みだそうです…でも、心配しないでね、ただの風邪みただから…」

小林先生は、教室に入って来るなり、教室にいる生徒達に報告した…。その言葉に、三人は騒ぎだし、後ろの席にいた元太が光彦に声をかけて来た。

「なあー、今日も帰り寄ってみよーぜ？」

「そうですね…」

「皆で行こー！ー！」

三人がそんな言葉を交わしている時…教室の扉が開いた……。

「おはようございます…」

顔を出したのは、噂をすればのコナンだった……。

「コナン君！ー！」

コナンの休む連絡を受けた直後の出来事だったので、さすがに皆驚いていた…。

小林先生がコナンに近寄り、自分の額とコナンの額を触り、見比べていた…。

「熱はないみたいだから、大丈夫そうだけど…」

「大丈夫だよ…もう治っちゃったから…」

「でも、無理しちゃダメよ？」

「うん、分かった!!」

そう言葉を交わすと、コナンを席に着かせた…。

席に着いたコナンは哀に”よっ”と、挨拶すると、哀は無駄な心配させられた事に不機嫌になり…瞳だけコナンの方に向かせると言った。

「余計な心配させてんじゃないわよ…」

「なんだお前、心配してくれてたのか…」

「私じゃないわ…あの子達によ…朝から大変だったんだから…」

「……」

哀にそう言われたコナンは、ゆっくり三人の方へ視線を移すと、三人は心配な面持ちでコナンの方を見ていた…。



## 病魔の発覚

「コナンくん、哀ちゃん!!」

「帰りましょー!!」

「行こーぜー」

授業が、終わり…帰る支度をしているコナンと哀に向かって言葉が投げかけられた…。

「おう!……帰ろーぜ、灰原…」

「ええ…」

そう言ってランドセルを背負うと、五人揃って…久々の下校を共にしていた…。

そして……これが最後の五人揃っての下校になるなんて、この時は知る術もなかった…。

「大丈夫ですか?コナン君…」

「ああ、平気だよ…悪かったな…心配かけちゃって…」

「いえ…では、僕達こっちですから…」

そう言う光彦を先頭に、曲がり道に差し掛かった三人は二人に手を降り叫んでいた…。

「また明日会いましょう…」

「哀ちゃん、まったね〜」

「じゃーなー、コナン！！無理すんなよ！！」

そう言う三人に、コナンは大きく手を降り…哀は顔だけ向いて微笑んでいた…。

「わーってるよ、じゃーなー」

二人だけになって…哀は漸く本題を切り出す事が出来た。

「ねえ、今朝何で遅刻して来たの？」

「ああ、ちよつと寝坊しちゃって…」

分かりやすい嘘をつくコナンにジト目で見る哀は…目線を戻すと言った…。

「遅刻…それで私が納得すると思ってるの？」

「まあ、いいじゃねーか…あつ、じゃーな…」

「ちよつと…」

丁度曲がり道に差し掛かり、哀の言葉を見殺して…コナンは探偵事務所の方へ歩いて行った…。

呆れながら、哀もまた帰り道を歩いている時…胸の痛みを感じた哀は、ドサツと音を立てて…その場に倒れこんでしまった。

それを感じたコナンは急いで哀の元へ駆けつけた…。

「おい、灰原…どうした？」

「うつっ…痛い…胸が苦しい…痛いっっ…」

コナンは心配な面持ちで、駆け寄り哀に声をかけるが、哀は更に胸を押さえて苦しみ出した…。

「おい、灰原…しっかりしろ…」

「うつつ…」

「灰原！？灰原あああ——！！」

コナンの叫び声が響き渡る中、哀はただただ、痛みに耐えていた…。

## 病魔の発覚（後書き）

次回ヒント

治療中

こんばんわ、実は、この中に出てくる坂井先生はZARDから取り  
ましたww

14年位、ファンなのです（＾ー＾）ノ

では、今日とっても寒いから、みなさん風邪に気をつけてくださ  
いねo（＾　＾）o

## 心配になるコナン

哀が倒れたのを目にしたコナンは急いで自分の携帯で救急車と、阿笠博士に連絡した…。

直ぐに救急車が到着して…コナンも一緒に付き添っていた…。

救急隊員による処置を施されながら、コナンは哀の顔だけを見続けた…。

病院に着き…ストレッチャーに乗せられ、治療室に運ばれる哀を追いかけるながら、賢明に声をかけるコナン…。

「灰原!!」

身長が足らず、哀の顔を見る事ができないコナンだったけど…哀の苦しむ声だけは耳に届いていた…。

「坊や、ちょっとここで待っててね…」

治療室の前まで来ると、看護婦さんがコナンに声をかけた…その声の一つ頷くと、治療室に運ばれる哀の乗ったストレッチャーをずっと眺めていた…。

「コナン君…ダメじゃないか、走ったりしちゃ…」

その声に振り向くと…坂井医師が何時の間にかコナンの後ろに立つ



ていた…。

「先生……」

「先生の勘違いだったみたいだね…コナン君が倒れて…自分で救急車呼んだのかと思って…毛利さんに連絡しちゃったよ…」

コナンの目線までしゃがむ坂井医師はコナンの顔を覗き込むと言った…そんな坂井医師の顔を一度見ると…再びコナンの目線は治療室へ向いた…。

「君の、友達かい？」

そう言われ、一度俯いたコナンだったが…もう一度坂井医師の顔を見ると言った…。

「先生…灰原…大丈夫…だね？」

「まだ、治療中だからね…担当の先生が出て来ないと分からないな…」

「そう…」

コナンの頭に手を置きながらそう言う坂井医師の言葉を聞いたコナンは寂しそうに俯いた…。

「こら、コナン…!」

その時、連絡を受け蘭を連れてやって来た小五郎に、コナンは鉄拳制裁を下された…。

「痛いよ、おじさん!」

「あつたりめーだ!!!誰が学校行けって言ったんだ!!!病室に戻れ

って言っただろーうがー!!」

「お父さん!!! いいじゃない、ちゃんと戻って来たんだから…」

その光景に見兼ねて、坂井医師はコナンの手を握ると言った…。

「まあまあ、とりあえず一度診察室へ行きましょう? もう分かったよね? コナン君…??」

「うん…」

坂井医師の言葉に頷くと、コナンは頭を摩りながら…診察室へ連れていかれた…。

## 心配になるコナン（後書き）

こんばんわ　　〇ー、ー〇

今年最後の投稿となりました

今年も残すところwww

3時間切りましたねへ（^^へ）（ノ^^）ノ

ガキ使見てる人、紅白見てる人…それぞれですが…皆さんが気持ちのいい新年になるといいですね、

また、来年会いましょう（\*、）ノ；・・\*+\*・・；；ノ  
皆さん、よいお年を8（^ ^8）（8^ ^）8””

では、今年最後のヒントにいきたいと思います

次回ヒント

約束

ですww

新年初投稿をお楽しみに??

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4767z/>

---

小さな運命共同体

2011年12月31日21時54分発行